

東洋文化研究所紀要 第一六九冊  
平成二十八年三月抜刷

豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

大野 公賀

# 豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

大野 公賀

はじめに

小論で取り上げる童話「化かされた博士」(原題「博士見鬼」)は、一九二〇年代後半から中国都市部の新興中産階級を中心に独自のイラストや小品文で人気を博した豊子愷(ほうしが、一八九八―一九七五)が雑誌『児童故事』<sup>(1)</sup>第四期(上海・児童書局、<sup>(2)</sup>一九四七年四月)に発表した作品である。豊は後に、同作品を含む、同誌第一期から第一期(一九四七年一月―同一年一月)に掲載した童話一〇篇と、雑誌『論語 半月刊』第二三四期(一九四七年八月一日)に掲載した小説「明心国」<sup>(3)</sup>の計一一篇を一冊にまとめ、童話集『化かされた博士』(原題「博士見鬼」、上海・児童書局、一九四八年二月)として出版した。

童話集『化かされた博士』に収められた作品は「もともとは子どものための笑い話や四方山話」として書かれたものであるが、教育に一家言をもっていた豊子愷は「面白いだけで意味のない」話は好きではなかった。そこで、豊は絵を描くにも文を書くにも、子どもの頃に母親がいつも食べさせてくれた中国の伝統菓子、茯苓餅をお手本とするこ

「豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

とにした。<sup>(5)</sup> 茯苓餅とはその名のとおり、生薬の茯苓<sup>(6)</sup>を使ったお菓子で、茯苓の粉末と米粉を水に溶いて丸型に薄く焼き、その間にジャムや蜜、ナッツ等を挟んだ物である。

豊子愷は、童話集『化かされた博士』の序文で、幼少時は茯苓餅について何も知らず、ただ美味しいと思うだけであつたが、少し大きくなると母の真意が理解できたと述べている。茯苓餅が単に美味しいだけでなく、健康に有益であるように、豊子愷もまた自らの作品がただ美しく面白いだけではなく、教育的に優れ、思想面でも良い影響を及ぼすことを願っていた。このような意図の下、童話集『化かされた博士』に収録された作品は、一見した所は子供向けの面白いお話のようだが、実は「背後に教訓を隠している」のである。<sup>(7)</sup>

童話集『化かされた博士』の作品には、中国内外の民話や言い伝えを基にしたものがいくつも見られるが、第一作目の童話「化かされた博士」は日本の古典落語「搗屋幸兵衛」を翻案したものである。江戸時代の日本の落語を戦後の中国の子ども向けの読み物とし、また「背後に教訓を隠」すために、豊子愷は時代設定や登場人物の性格、職業、関係性等に様々な工夫をこらした。小論では、童話「化かされた博士」に焦点をあて、豊子愷が「搗屋幸兵衛」を如何に翻案したか、またそこに隠された「教訓」とは何であつたかを考察したいと思う。

一．あらすじ

(一) 落語「搗屋幸兵衛」

まず、豊子愷が翻案したと思われる落語「搗屋幸兵衛」の内容を簡単に見ておきたい。

小言好きなことから、周りから「小言幸兵衛」と綽名される家主の幸兵衛は、毎朝長屋を一回りして店子を叱り歩かなければ気が済まない。家に戻れば戻ったで、老妻のやることなすこと一々気に入らず、家の中でも外でも始終、小言を言い続けている。

そこへ訪れたのは貸家札を見た男で、先約の有無を尋ねる。男の職業が搗米屋つぎとめやと聞いて、幸兵衛は男を家へ招き入れ、実はあの空き店は以前やはり搗米屋が借りていて、自分はその隣で荒物屋を営んでいたのだと語り始める。知り合いの紹介で結婚した妻は気立てのよい美人で、自分を大切にしてくれる上によく働き、妻のおかげで商売も大いに繁盛した。ところが、妻はふとした風邪から患いつき、無理がたたって帰らぬ人となった。

死の間際、もし自分に何かあったら、妹を後添いにしてほしいと妻に頼まれ、初めは誰とも再婚しないと云っていた幸兵衛も、妻のたつての願いに妹を後妻に迎えた。妹は姉に勝るとも劣らぬ美人で、同じように優しく、幸兵衛は自分の女房運の良さを喜んでいた。

結婚当初は幸せに暮らしていた二人であったが、しばらくすると妻は何かを頻りに気に病むようになった。不審に思った幸兵衛が妻に訳を尋ねると、姉は幸兵衛と自分の結婚を自ら望んでおきながら、実は自分のことを恨みに思っているのではないかと、毎朝仏壇を掃除した後にお茶湯ちやとを供えに行くと、前を向いていた筈の位牌が必ず後ろ向きになっていると言う。妹はこれが原因で病の床につき、ついには亡くなってしまった。

妹のための新しい位牌を作り、姉の位牌と並べた日の翌朝、幸兵衛が仏壇の掃除をして位牌を整えた後、お茶湯を供えに行くと、初めは前を向いていた筈の位牌が二基とも後ろ向きになっている。てっきり狐狸の仕業かと、徹夜で位牌の番をしていると、何も起こらぬまま夜が明け、隣の搗米屋が踏み白で仕事を始めた。幸兵衛がふと見ると、米

を搗く振動につれて位牌も少しずつ動き、やがて後ろ向きになった。

この嘶は最後、幸兵衛が部屋を借りに来た搗米屋に向かつて、最初の妻は寿命だから仕方がない、しかし妹の方は位牌の異変を気に病んで亡くなったのだから、搗米屋に殺されたようなもの、いつか搗米屋が越して来たら「女房の仇を打とう」<sup>74</sup>と思つて待つてたんだよ、そこを動かすな」と叫ぶ場面で終わる。<sup>8)</sup>

## (二) 童話「化かされた博士」

次に、豊子愷の童話「化かされた博士」について、あらすじを述べたい。

主人公の林博士は国立大学の理系研究院で院長を務める研究者である。ヨーロッパへの留学経験をもち、数学の定理を発見して、国際学会で賞を受けたこともある。帰国後に結婚した王女史も大学で数学を学び、優れた成績で卒業した才女である。彼らは互いに深く愛し合っていたが、結婚して二年目の年に妻が突然、腸チフスに罹り、明日も知れぬ命となった。自らの寿命を予知して泣く妻をなだめて、博士はもし妻に何かあっても自分は決して再婚などしないと自ら妻に誓うが、看病の甲斐もなく妻は亡くなる。

妻が亡くなったのは陰暦の年末で、博士も年末年始は葬儀の準備で忙しく、感情を抑えることができた。そうこうするうちに悲しみも薄れ、博士は次第に一人暮らしの寂しさや不便さの方が気になるようになった。当初は妻への誓いを重んじ、親戚や友人に再婚を勧められても断り続けていた博士であったが、次第に亡くなった妻に義理立てすることが馬鹿らしく思え、さらには自分のことを深く愛していた妻があつた世で心配することのないように、むしろ再婚した方がよいのではないかとさえ思うようになった。科学者である林博士は「靈魂<sup>9)</sup>の存在など、少しも信じていなかった

た」のである。

その後、林博士は親戚や友人から紹介された女性の中から、大学で教育学を学んだ李女史を選んで、先妻の王女史の葬儀の数ヶ月後、清明節の頃に再婚した。李女史はしきたりを重んじ、善良で優しく、著名な学者の妻に最も相応しい女性と思えた。結婚当初は幸せに暮らしていた二人であったが、やがて博士は嬉しいことや楽しいことがある度に急にふさぎこんで、まるで何かを憂えているかの様子を見せるようになり、時には悲しげな寝言さえもらすようになった。その訳を李女史に何度も尋ねられ、博士は先妻の臨終の際に再婚をしないと誓ったにも関わらず、その約束をたがえてしまったことが先妻に申し訳なく、心苦しくてならないのだと胸の内を明かした。

それを聞いて、李女史は大いに驚いた。慣例や決まり事に重きを置く彼女にとって、破約は恐るべき大罪である。また、李女史は「半旧式な女性」、つまり近代教育を受けた女性でありながら、旧式の道徳や思想に縛られており、「迷信を完全に打破することができなかった」のである。李女史は、夫の苦しみや寝言はすべて先妻の崇りのせいだと信じ、林博士との結婚を後悔し、先妻はきつと自分のことを妬み、恨んでいるに違いないと考えては、日々激しい恐怖を感じるようになった。こうして夫妻は、しばしば先妻の幽霊を目撃しては不安と恐怖に怯えた日々をおくるようになる。

先妻の一周忌、博士と妻は僧侶を招いてお経をあげてもらうと、仏壇にひれ伏して、それぞれ「誓いを破ったこと」や「誤って林博士に嫁いだ罪」を許してくれるようにと懸命に拝んだ。それにも関わらず、翌日の早朝に仏壇の位牌の向きが変わっているのを見て、妻は絶叫し、恐怖に打ち震えた。妻は「これは明らかに死者の霊が姿を現して、自分たちに対する恨みの程を見せつけ、自分たちが謝っても決して許さない、自分たちのことは見たくもない」という気

持ちの表れだと考えたのである。

博士と妻は位牌の位置を直し、さらに熱心に拜んだが、位牌は翌日も反対を向いていた。それを見て、「生涯をかけて科学を研究し、靈魂を信じない林博士も、今回ばかりは自信が揺らぎ始めた」。三日目の朝、位牌がやはり反対を向いているのを見て、博士は「靈魂の存在を確信した」。これ以降、二人は以前にも増して先妻の幽霊を目にするようになり、妻は気鬱から病の床につき、その年の冬の初めに亡くなった。

先妻と後妻の位牌を前に、博士は改めて冷静に「自分はこれまで学問をして、万巻の書を読んできたが、鬼神が存在する理由は未だにわからない。この世に幽霊は本当に存在するのだろうか」と思い、徹夜で幽霊の正体を突き止めることにした。博士が瞬きもせず位牌を見つめる中、隣の農夫が夜なべ仕事に脱穀を始めると、その音にあわせて位牌が少しづつ向きを変えていった。脱穀の振動が原因とわかった博士はただ一人、大声で「幽霊！幽霊！なるほど、我々は物理法則から逃れられないのだ！」「もし去年、このことがわかっていたら、二人目の妻は死ぬことなどなかったらうに！彼女は死なずに済んだのに！」と憂い嘆くのであった。<sup>10)</sup>

## 二、「搗屋幸兵衛」と「化かされた博士」

### (一)「搗屋幸兵衛」の笑い

以上、落語「搗屋幸兵衛」と豊子愷の童話「化かされた博士」のあらすじを見てきた。この二作を比較するにあたり、本節ではまず「搗屋幸兵衛」の面白さについて考察する。

話術による笑いや細かな可笑しさを除いて、「搗屋幸兵衛」の噺としての面白さは、主として以下の二点にある。第一は、後妻が病死する程までに気に病んだ先妻の亡霊の正体が、実は脱穀の振動に過ぎなかったという点である。聴衆はその意外な結末を楽しみ、また亡霊や祟りを信じて、ついには怯え死んでしまう後妻の愚かしさを笑う。それは、亡霊や祟りを信じる迷信深さや非科学性に対する笑いであり、その根底にあるのは、かりに同様な立場に置かれたとしても、自分は決してそのようなことにはならないという自信や余裕である。これは、他者の愚かしさに対する、一種の優越的な笑いである。

第二は、幸兵衛が後年たまたま部屋を借りに来ただけの通りすがりの搗米屋に向かって、二番目の妻が亡くなったのは搗米屋のせいだ、今こそ「女房の仇を打」<sup>ウツ</sup>ってやる、そこに直れと迫る理不尽さにある。幸兵衛の強引な理屈に加えて、日頃は筋の通らない話が大嫌いで、正論一本やりで小言を言い続けている幸兵衛が一転、あまりにも無茶な言いがかりをつけることの差異が人々の笑いを誘う。

この第二の笑いをもたらすために、主人公の幸兵衛は若い頃には貧しい店子の一人で、最初の妻と二人で荒物屋として懸命に働いて資産を蓄え、後に大家となった人物と設定されている。

この幸兵衛の「大家」という立場であるが、これは現在の貸家主とは異なり、江戸時代には職業であると同時に一種の身分でもあった。<sup>11</sup> 当時、市制の末端には「町年寄・名主・五人組・月行事・家主（大家）」体制に基づいた自治が敷かれており、「大家」は長屋の所有者である「地主」に雇われた使用人ではあるものの、地域の治安や住民の保護等、江戸の町政に関与する一種の町役人でもあった。<sup>12</sup> 江戸の町における大家の人数は決まっており、欠員が生じた際に大家株を買うことで大家になることができた。この株の譲渡に要する権利金は、地主からの年俸の多寡や余得に

― 豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について



よって異なるが、少なくとも数十両以上必要で、条件によっては数百両することもあった。収入は町費から受け取る報酬（大家株の年給）、店子からの「節句銭」等の余得、また店子の下肥を農家に売って得た代金等である。大家は自分の采配する店子に対して連帯責任があり、「警察・消防・民事相談まで、店子の生活全般に渡って面倒をみる」ことが大家の職務とされていた。大家には店子の選別や立ち退き請求の権利もあり、店子の日常生活や商売にも細かく介入していたようである。<sup>13)</sup>

特に財産や後ろ盾もない、しがない店子の一人であった幸兵衛が、荒物屋の収入を貯めて大家の株を手に入れるには並々ならぬ勤勉さと節約、そしてそれを成し遂げるだけの強い意志や厳しさが必要だったことであろう。また、「搦屋幸兵衛」の冒頭で、幸兵衛は店子にうるさいまでに細々とした注意を与えるが、それは当時の大家としては極めて当然のことであった。幸兵衛のあまりの小言に聴衆は笑いを誘われるが、この場面は一方で幸兵衛の真面目さや責任感を表してもいる。幸兵衛が面白みに欠ける真面目一方の堅物で、店子や三番目の妻が引き起こす小さな失敗や不注意に、正論をかざして口うるさく注意すればする程、最後の場面の理不尽さが際立ち、大きな笑いを生むのである。

## (二) 幸兵衛の自信と林博士の罪悪感

「搦屋幸兵衛」では部屋を借りに来た搦米屋を相手に幸兵衛が語り続けるが、「化かされた博士」では林博士の不幸な出来事について第三者が語るといふ形式がとられている。亡霊の正体が発覚した後も、博士は自らの愚かしさを一人嘆くばかりで、事件を引き起こした農夫を相手に文句を言うこともない。

本章第一節で述べたように、「搦屋幸兵衛」の笑いの第二点目は、幸兵衛がただ部屋を借りに来ただけの、言わば

縁もゆかりもない搗米屋に長々と思ひ出を語り、聴衆がその後の展開を楽しみに待ちうけているところに、幸兵衛が突如あまりにも理不尽で無茶な八つ当たりを平然と言つてのけることが鍵である。一方、「化かされた博士」では、上述のようにこの場面自体が存在しないため、「搗屋幸兵衛」のもつナンセンスな笑いも存在しない。

豊子愷が「搗屋幸兵衛」を翻案するにあたり、「化かされた博士」で利用したのは、「搗屋幸兵衛」のもう一つの笑い、すなわち亡霊や崇りを信じることの愚かしさを利用した笑いである。「搗屋幸兵衛」の登場人物が皆、市井の庶民であるのに対し、豊子愷は「化かされた博士」の登場人物を全員、大学で近代的な学問を修めた知識人としたが、それはこの笑いを強調するためと考えられる。

「搗屋幸兵衛」の主人公である幸兵衛は、「化かされた博士」の林博士とは異なり、後妻が先妻の崇りに怯えても真剣に取り合わず、妻の位牌が後ろ向きに変わるのを自分自身で確かめた後も、それを先妻の幽霊の仕業と考えて怯えることもない。しかし、それは決して幸兵衛が林博士よりも理性的で、幽霊や迷信を信じていないからではない。「大家」という町役人を務めるだけに、幸兵衛は世間の事情にも通じ、物もよく知っていたであろうが、位牌の一件を狐狸の悪戯かと疑うことから明らかなように、幸兵衛もまた江戸時代の多くの庶民と同様に、迷信や非合理的な考えから完全に自由な訳ではない。

幸兵衛が幽霊の存在自体は否定していかないにも関わらず、妻の亡霊やその崇りを恐れていないのは、幸兵衛の再婚が自分自身の意志ではなく、先妻の強い願いによるものだからであり、また更に言うならばこれまで公明正大に生きてきた自分が先妻からであれ、他の人からであれ、個人的な恨みや崇りを買う筈がないという自信の故である。自分に落ち度がない以上、幽霊といえども恐れるに足りないのである。

「豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

それに対して、林博士は死の床についた先妻に自らが率先して誓いを立てたにも関わらず、先妻の死後わずか数ヶ月でそれを破り、再婚してしまったことに對する罪悪感に日々苛まれている。その罪悪感の故に、博士はしばしば悪夢にうなされ、先妻の亡霊を見る。博士は若い頃にヨーロッパへ留学し、現在は国立大学の理系研究院で院長を務める研究者であるが、幽霊の前には科学者としての知識も理性も無用である。

また、「化かされた博士」と「搦屋幸兵衛」では、結婚に至るまでの経緯にも相違がある。前述のように、幸兵衛は先妻である姉の意志でその妹と再婚したが、姉との結婚も人の紹介で、いずれも幸兵衛が自らの意志で妻に迎えた訳ではない。それに対して、「化かされた博士」では先妻との結婚や誓い、そして後妻との再婚等、博士の行動はすべて自らの意志に基づいているが、それは博士が旧社会とは別の、新しい価値観をもった新時代の人間であることを象徴している。先妻、後妻ともに、林博士が多くの女性の中から選び、愛した相手である。そのような相手であればこそ、博士は先妻との破約に苦悩し、また二番目の妻までも不幸にってしまったという二重の罪の意識に苛まれるのである。

### (三) 後妻たちの苦悩と罪悪感

「搦屋幸兵衛」で先妻の亡霊に怯えるのは、先妻である姉の願いに応じて幸兵衛と再婚した妹である。「化かされた博士」とは異なり、この再婚自体が先妻の強い願いによるものであり、本来ならば妹は姉に感謝されこそすれ、怒りや恨みを買うようなことは何もしていない。それにも関わらず、妹はなぜ姉の亡霊を恐れなくてはならないのか。

そもそも、幸兵衛の先妻が死の間際に、自分よりも「年齢としが若くって、そして器量もいい」妹との再婚を強く願っ

たのはなぜであろう。再婚自体を決る幸兵衛に対して、先妻はこう懇願する。

『どうせ、こいだけの身上（ま）になったんだから、貴方はおかみさんを持つでしょう』『いや持たないよ——お前（ま）みたいな、女（ま）アもういなくなるからには』（中略）『いいえ、そうはいきません。でそういうふうには、知らない人があとい、なおるよりか、あたしの、妹をすいませんが、旦那あたしだと思つて可愛がつてやってく下さい』<sup>14</sup>

先妻は、夫の幸兵衛、そして幸兵衛と二人で苦勞して貯めた財産の二つが、縁もゆかりもない他の女性の物となるのが耐えられなかつたのである。

一方、再婚を承諾した妹の気持ちについては何も表現されていない。しかし、幸兵衛が結婚生活を振り返つて『まあありがたいなア世の中に俺（ま）ぐらい、エ運のいい者（ま）アないなア——先（ま）のかみさんは、亭主（ま）思ひでああやつて一生懸命に働いてくれたし、寿命（ま）ずくとはいいながらその女房が、いなくなつて、そして、二度添（ま）いをもらうとなつたら、え？その妹をもらつてくれつて、とこれがまた年齢（ま）が若くつて一生懸命に働いて、女（ま）がよくつて本（ま）当に俺（ま）ぐらい恵まれてる者（ま）アない』と、あたし（ま）ア思つたなア』と惚（ま）氣（ま）ていること（ま）から、妹も幸兵衛と結婚した当初は平穩で幸せな日々を過（ま）ごしていたと思われる。しかし、幸兵衛との結婚生活が幸せであればある程、妹は亡（ま）くなつた姉に申し訳なくもあり、また姉を不憫にも思つていたのではないだろうか。朝、姉の位牌が反対を向いているのを見ても、妹は初めからそれを氣に病んでいた訳ではない。それはおそらく、姉が自分を恨むとは夢にも思つていなかったからである。

しかし、連日のように位牌の向きが変わるのを見て、妹もその訳をあれこれと考えるようになり、ついには姉が自分の幸せを恨んでいるに違（ま）いなと思ふようになる。幸兵衛との結婚は姉自身の強い願（ま）いによるものであるが、後にして思（ま）えば、それも姉が死の間際まで夫幸兵衛と財産に執着していたからに他ならない。自分が今その両方を楽々と

手に入れ、幸せに暮らしているのを、姉はあの世でどう思っているだろうと考えただけで、妹は恐怖に怯え凍んだことであろう。

一方、「化かされた博士」において、林博士が再婚した李女史は、大学で近代教育を受けた新世代の女性であるが、思想的には旧式の道徳に縛られた「半旧式な女性」である。先妻との約束を破ったのは李女史ではなく夫の林博士であり、李女史は林博士との結婚以前にはその約束の存在すら知らなかったにも関わらず、博士との結婚を悔やみ、自分を責め続ける。先妻の臨終間際に博士が立てた誓いを知った日から、李女史は不安と恐怖に怯え、地獄のような生活をおくるが、彼女に先妻の亡霊を見せるのは彼女自身の後悔と自責の念に他ならない。何も知らずに結婚した以上、李女史には本来、何の罪もない筈である。しかし、李女史のように「半旧式な」考えをもち、世間のしきたりや決まり事を重んじる女性にとって破約は大罪であり、知らなかったとは言え、自分は結果として夫にその罪を犯させた共犯者なのである。

「搗屋幸兵衛」と「化かされた博士」の二人の後妻は、どちらも自分自身は何の罪も犯していない。しかし、それにも関わらず、二人は自分で自分を責め、ついには先妻の亡霊に怯え死ぬ。幸兵衛の後妻は姉の死と交換に自分が辛くなったことに、そして李女史は林博士に約束を破らせてしまったことに、それぞれ責任と罪の意識を感じている。二人を死に追いやったのはいずれも罪悪感である。幸兵衛の後妻が実の姉である先妻に申し訳なく感じるの、人間の心理として理解しうるものである。一方、李女史の罪悪感先妻に対する申し訳なく感ではなく、破約という罪に由来している。前述のように、李女史はしきたりや約束を守ることに重大な価値を置いている。先妻とは何の縁もなく、本来ならば罪の意識など覚える必要のない李女史に敢えて罪悪感を覚えさせるための設定として、豊子愷は李女史を

このように従順で「半旧式な女性」としたのであろうか。

あるいは、旧時代において東洋の女性は、裏切った男性ではなく、その相手の女性を憎み、恨むと考えられていたためであろうか。小泉八雲が出雲地方の伝説を翻案した小説「破られた約束」は、ある武士が妻の死の間際に決して再婚はしないと妻に誓ったものの、家督のためもあって再婚した所、嫉妬にかられた先妻の亡霊が後妻を呪い殺すという話である。同作品は怪談であるため、先妻の亡霊が実際に姿を現し、後妻の生首を引きちぎるといふ恐ろしい結末で終わるが、再婚をめぐる破約や先妻の亡霊、そして後妻の死という点で「搗屋幸兵衛」や「化かされた博士」によく似ている。「破られた約束」においても、先妻の恨みは約束を破った夫ではなく、罪もない後妻に向けられている。これについて八雲は最後に、この話を語ってくれた友人との会話という形で次のように述べている。

「これはまた、ひどい話だ」わたしは、それを物語った友人に言った。「復讐をしたければ、死んだ女は男にたいしてするべきだった」

友人は答えた。「男はそう考えるけど、女は、そういうようには思わないのだよ」  
なるほど友人の言うところは正しかった。<sup>16)</sup>

尚、上記の会話で八雲にこの話を伝えた友人は、原文では「He」と記載されており、男性と設定されているが、実際に八雲にこの話をしたのは妻の小泉セツとされている。

#### (四) 米を搗くこと

二人の後妻を苦しめ、ついには死に至らしめた幽霊の正体は、実は隣家の米を搗く振動であった。その意味におい

豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

て、この米を搗くという行為は話の展開上、不可欠の要素であるが、「搗屋幸兵衛」と「化かされた博士」では行為の主体や時期、理由に相違が見られる。

まず「搗屋幸兵衛」における行為主体は、玄米を臼で挽いて精白する米の小売店搗米屋で、搗屋または米屋とも呼ばれる。当時、江戸に入って来る米のうち、幕府や各藩の米は米問屋が仲買に卸していた。これを精米して販売する搗米屋という業態が確立したのは明暦（一六五五―一六五七）の頃からとされている<sup>17</sup>。搗米屋では店の土間に唐臼（踏臼）を据え、その腕木に米搗こもきと呼ばれる日雇いの労働者が乗り、この下に置いた玄米を足で踏みつけて搗いた。その振動と騒音は凄まじかったようで、当時の川柳には「早起きは米屋の向こう両隣り」、「しぶしぶに米屋の隣早く起き」等、搗米屋の地響きを題材とした作品も少なくない。

一方、「化かされた博士」において、米を搗くのは林博士の隣に住む農夫である。搗米屋が毎日、早朝に作業するのに対し、林博士の近隣の農夫たちは冬至の前後に夜なべで米を搗く。幸兵衛と林博士が幽霊の正体に気がつく時間がそれぞれ早朝、夜中と異なっているのは、搗米屋と農夫の作業の時間が異なるためである。

「化かされた博士」で、先妻が亡くなったのは旧暦の年末のことで、博士は翌年の冬至にその一周忌法要を営み、その翌日以降、位牌が常に反対を向くのを見て後妻は病の床につき、翌年の冬の初めに亡くなる。博士はその年の冬至には、先妻と後妻の二人の位牌を並べ、法要を執り行った。この法要について、「化かされた博士」では「慣例通り祭祀を執り行う」と述べられている<sup>19</sup>。冬至に法要を営むのが、なぜ「慣例通り」なのだろうか。これについて、中国の冬至の伝統的風習から考えてみたい。

古来中国では、冬至節は春節（旧正月）につぐ重要な節令として、朝廷では祭天や朝賀が盛大に行われ、民間でも

祖先への供薦や祭祀、家長への進酒、師老への拝賀等の行事が盛んに行われた。冬至節がこのように重んじられ、春節に相似した風習をもつ理由としては「古くに一歳の生活の終わりと始めを冬至に置いた生活習慣の残存」が指摘される。その後、清朝の滅亡とともに冬至節の朝廷行事も消滅し、民間における祖先祭祀の風習も次第に廃れていった。<sup>(20)</sup>

魯迅の小説「祝福」には、冬至の日に先祖の祭祀を行う様子が記されているが、豊子愷の故郷桐郷は魯迅の故郷紹興と同じ浙江省にあり、豊の父（豊鑽）は笨人<sup>(21)</sup>で、魯迅の生家と同じく読書人の家庭であることから、豊自身も同様な祭祀の経験をもつと考えられる。この「祝福」とは、旧時、江南一帯で行われていた大晦日の行事のことで、「福札」と呼ばれる三牲（一般に鶏、鵝鳥、豚）の肉や、放生のための生きた鯉等を神や祖先に供えて、一年の無事を感謝する。また、一夜明けて新年には「福札」の他に、果物を盛った鉢や「田舎特有の餅や粽」も供えられた。<sup>(22)</sup>

また、中国語で餅を表す「年糕」は、「糕」の発音が「高」<sup>(23)</sup>と同じであることから「年ごと良くなる」という吉祥の意味をもち、新年を祝うめでたい食品とされている。中国の江南地方では、農民たちは秋の収穫を終えた農事的に最も暇な時期に新年のための餅の準備を始める。そのため最初の作業は、餅を作るための粉を搗くことである。<sup>(24)</sup>

江南地方にこのような風習が残されていたことや、前述の冬至の伝統を考えると、「化かされた博士」において隣家の農夫が「勤勉だから」という理由で、冬至の当日およびその前後に取って夜なべ仕事に米を搗くのはいささか奇妙で、むしろ農閑期に新年の餅の準備として行う方が自然ではないかと思われる。豊子愷が「化かされた博士」において、農夫が冬至からその後の数日間、連日のように米を搗くように設定した理由は不詳であるが、敢えて言うなら

「豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について



ば、祭靈を行った冬至の日に、位牌の変化に初めて気づいた林博士夫妻が、その後も毎日のように続く異変に次第に恐怖心を煽られていく様子を描くためであろうか。

### 三・豊子愷の隠した「教訓」と魯迅の問い

#### (一) 翻案と豊子愷の「教訓」

第二章では、童話「化かされた博士」を執筆するにあたり、豊子愷が落語「搗屋幸兵衛」を如何に翻案したかを見てきた。以下、それを簡単にまとめると、江戸時代の日本と戦後の中国という時間や場所の設定、そしてそれらに基づく微細な相違のほかに、主として次の三点に相違が見られる。

まず、幸兵衛と博士の再婚に至る経緯と相手である。幸兵衛は先妻の希望で、その妹と再婚した。相手の選択も含めて、この再婚には幸兵衛の自発的な意志は存在せず、そうであるが故に幸兵衛は先妻に対して何の罪の意識も感じていない。一方、林博士は自ら先妻に誓いを立てたにも関わらず、自ら再婚を希望し、自ら李女史を選んだ。すべてが自らの意志に基づいた自発的な行為である以上、その責任もまた自分自身で負うしかないのである。この一連の責任と、それを誰にも転嫁できないという思いは、近代的知識人である博士に重くのしかかり、博士は再婚当初から陰鬱な気分の日々をおくっている。

次に、二人の後妻の意識の相違である。幸兵衛の後妻が先妻に抱くのは、申し訳なさや憐れみによる罪悪感である。それに対して、李女史の場合は、破約という夫の大罪に自分も加担してしまったことへの罪悪感である。両者は、罪

の意識という点では同じであるが、その内容には大きな違いが見られる。

第三点としては、結末の相違である。「搗屋幸兵衛」では、幸兵衛は部屋を借りに来ただけの通りすがりの搗米屋に八つ当たりのな言掛かりをつけて終わる。幸兵衛は位牌について狐狸の仕業かと疑うことはあるが、先妻の亡霊と思うことは一度もない。これは、幸兵衛が幽霊の存在を信じていないからではなく、先妻に対して罪の意識を感じていないからである。一方、林博士は先妻に対する後妻の恐怖心の影響もあつてか、比較的早い時期から先妻の亡霊に怯えるが、後妻の死後に冷静さと理性を取り戻す。最後に、亡霊の正体が米搗きの振動だと知った博士は、すべて物理法則によるもので、自分や後妻はそれに気付かぬまま、幽霊や崇りといった迷信や非科学的思考に振り回されていたことを知り愕然とする。

小論の冒頭で述べたように、豊子愷はただ「面白いだけで、意味のない」作品ではなく、読者に良い影響を及ぼす作品の創作を心がけており、その背後にはしばしば「教訓」が隠されていた。では、豊子愷が「化かされた博士」に隠した「教訓」とは一体、どのようなものであったのだろうか。それは、「化かされた博士」の結末で博士が嘆いた、迷信や非科学的思考に振り回されることの愚かしさであろう。

## (二) 豊子愷の仏教信仰と迷信否定

豊子愷は仏教徒として知られるが、仏教信仰による果報を求めて迷信的な仏教行為や形式的な礼拝、念仏、菜食等を行う「いわゆる仏教を信じる人」には強い嫌悪を抱いていた。豊子愷も菜食者ではあったが、それは体質的な理由によるもので、肉食をしないことや仏教帰依式を受けていることで、上述のような信者から「同志」の扱いを受ける

——豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

ことには辟易するとまで述べている。<sup>(25)</sup>

豊の故郷浙江省はそもそも仏教信仰の盛んな地域で、豊が晩年に綴った幼少期の回想には、盂蘭盆の施餓鬼法要や「謝菩薩」等の様子が記されている。「謝菩薩」とは別名「拜三牲」とも言い、豚の頭や魚、鶏を菩薩に捧げ、病を治癒してもらおうという民間信仰の行事で、豊子愷自身も何度か菩薩に祈った経験をもつ。<sup>(27)</sup> 中国では、一九一〇年代後半から二〇年代にかけての新文化運動期に、迷信の打倒や宗教自体を否定する動きが生じ、仏事や民間の宗教儀礼は迷信であるとして廃止され、各地で寺院が破壊されたが、豊の幼少期にはまだ俗信や迷信、民間信仰が盛んに行われていた。豊子愷は一九一四年から一九一九年にかけて、浙江省における五四新文化運動の中心地であった浙江省立第一師範学校に学んだが、これはまさに民間信仰や宗教に対する攻撃や批判の最も盛んな時期であった。幼い頃に自分自身も様々な民間信仰の行事を体験しているだけに、そうしたものに對する反発も一層で、豊子愷はその後、生涯にわたり民間の宗教儀礼や迷信的な信仰の姿勢、そして民衆の無知を利用する僧侶らを軽蔑し、激しく嫌悪していた。

その後、豊子愷は上述の浙江省立第一師範学校時代の恩師で、一九一八年に出家した弘一法師（俗名李叔同、一八八〇—一九四二）の影響もあり、一九二七年に法師による仏教帰依式を受けた。弘一法師は豊子愷を仏教へと導いたが、その教えは仏教經典の研究や言葉での理解よりも、念仏や菜食を重視するものであった。法師はこうした実践を通じて、豊子愷が仏教の奥義を会得し、修行の道を完成することを望んだが、それは豊の仏教への関心とは方向を異にするものであった。<sup>(28)</sup> 仏教帰依式を受けた当時、豊子愷は家族の度重なる不幸や中国の将来を憂い、精神的に追い詰められていた。そこからの解脱を求めての仏教への帰依であったが、五四新文化運動の洗礼を受け、迷信や封建的風習に否定的であった豊子愷が必要としていたのは、念仏や菜食等の実践ではなく、むしろ納得できるだけの理論的裏

付けであった。

豊子愷にそれを授けてくれたのは、弘一法師の友人で、出家前の法師（李叔同）に最初に仏教の手ほどきをした儒学者の馬一浮（一八八三—一九六七）である。馬一浮は豊子愷に、人の境地を決めるのは心であり、それ故にこそ心を護ることが何よりも重要であると説き、仏教や人生そのものに対して錯乱状態にあった豊を救ったのである。

一九三八年一月、広西省（現、広西チワン族自治区）宜山に疎開していた馬一浮が、同じく同地に疎開していた豊子愷に贈った詩に次のような一節がある。

『華嚴経』の偈に云う。心は巧みな画師のようで、一切の現象を見事に表出する。<sup>29</sup>私<sup>30</sup>が常々君に謂うように三界にはただ心だけが存在し、また三界にはただ画だけが存在する。<sup>31</sup>

この「三界にはただ心だけが存在する」とは、三界の現象はすべて心の働きによって映し出された幻影であるという意味である。豊子愷は馬一浮のこのような教えに深く賛同し、自らも心の働きに重きを置いた「護心主義」を生涯にわたって提唱した。「化かされた博士」において、林博士や李女史が見た先妻の幽霊は、まさに彼らの心の働きが生み出した幻影であった。

## （二）魯迅「祝福」へのオマージュ

これまで見てきたように、豊子愷の「化かされた博士」（一九四七年）は落語「搗屋幸兵衛」の翻案であるが、同時に魯迅の「祝福」（一九二四年）にも影響を受けたのではないかと考えられる。小説第二章第四節で述べたように、魯迅の「祝福」には、かつて中国の江南地方で行われていた冬至の先祖祭祀の様子が描かれているが、豊子愷が「化

豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

かされた博士」において、わざわざ冬至節に法要を執り行ったのも、同作品が「祝福」へのオマージュであることを暗示するためとも考えられる。<sup>(32)</sup>以下、「祝福」のあらすじを簡単に見ておきたい。<sup>(33)</sup>

「祝福」の主人公、祥林嫂は二〇代半ばの若さで一〇歳年下の夫に先立たれると、姑から再婚を強制されそうになったため婚家を逃げ出し、魯鎮の魯四老爺（語り手「私」の父方の四番目の叔父）の家に下働きとして雇われた。真面目に働く祥林嫂は魯家で重宝がられたが、姑に見つかり、山奥の村に花嫁として売られてしまう。祥林嫂の貞節観念は強く、初めは頑なに再婚を拒んでいたが、やがて息子も生まれ、祥林嫂にとってはおそらく生まれて初めての平穏で幸せな生活が続いた。

ところが、間もなく二番目の夫はチフスで亡くなり、息子も狼に食べられてしまう。行き場を失った祥林嫂は再び魯家に戻って働き始めるが、大晦日の「祝福」や冬至のような祭祀の際には祭器はおろか料理にさえ手を触れることも許されない。魯四老爺の考えでは、祥林嫂のように二度も夫に死なれた女性は同情には値するが、言わば「良俗を敗る者」であり、「不浄」な存在とされてきたからである。再婚以前には、祭祀の準備は「祥林嫂の勤勉と能力をもっともよく示す仕事」であった。それにも関わらず、二番目の夫の死後、この準備への参加を拒否されたことは祥林嫂には大きな打撃であった。それについて、丸尾常喜は次のように述べている。

祭りの準備に加わることは、共同体に約束される幸福の末端に、自分もまちがいなく連なっているのだという実感を与えるものであり、手伝いといえ祭祀に関与できることは、祭り祭られる関係でつくられた強固な単位の集合である社会のまだその一員であることを意味するものであったにちがいない。<sup>(34)</sup>

魯家に戻った年、祥林嫂は「祝福」の手伝いに雇われた柳媽から、「さきであの世に行ったとき、亡者になつて

二人の亭主があんたの取り合いをしたら（中略）、閻魔様も困っちゃまって、あんたを鋸で二つに挽いて、二人に分けなさるしかあるまい」と脅され、大きな衝撃を受ける。祥林嫂は再婚という「大罪」を償い、「あの世の苦しみを許してもらおう」ために、信心深い柳媽の勧めに従い、全財産を投げ打って土地廟に敷居を寄進する。寄進によって罪滅ぼしできたと思える祥林嫂であったが、その心の平安も束の間のことであった。この贖罪の論理は「礼教の徒魯四老爺」からは一顧だにされず、<sup>36</sup>祥林嫂は冬至の先祖祭祀の準備への参加を拒否される。祥林嫂はこの時から「たいへん臆病になって、闇夜や黒い影を恐れるのはまだしも、人の姿を見ても、自分の主人にまでひどくおどおどして、白昼巢穴を出てさまよう鼠のよう」になり、やがて魯家を追われてしまう。

作品は、語り手の「私」が五年ぶりに祥林嫂に会う場面から始まるが、その時「真正正銘の乞食」となっていた祥林嫂は「私」に、「人間が死んだあとも、魂は有るんでしようか」と問う。「たぶん、有るだろう」と口ごもりながら答える「私」に、祥林嫂は続けて「それじゃ、地獄も有るんでしようか」、「それじゃ、死んだ家族はみんな顔を合わせるんでしようか」と質問を投げかける。祥林嫂が「私」にこのような質問を浴びせるのは、「私」が「学問したお方だし、よそにも出て、たくさんを知っていなさる」からである。しかし、「私」は祥林嫂の問いにうまく答えてあげることができない。なぜならば、魯鎮の人々は「亡霊を信じている。なのに、彼女は疑っているのだ——いや、希望していると言った方がいいかもしれぬ。有ることを希望し、同時にないことを希望している」からである。

祥林嫂が「相反する二つの『希望』にひき裂かれ」、彼女にとつては「死さえも休息ではない」ことがわかるからこそ、「私」は魂の有無について軽々に答えることができない。しかし、祥林嫂にとつて、死後の魂という問題は、「死を前にして、どうしても確かめておかねばならぬ『切問』<sup>36</sup>であった。「私」と話した翌日、祥林嫂は人知れず亡くなっ

「豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

た。「私」は、祥林嫂のように「現世においては、生きるすべなき者が、その死によって、目をそむける者たちの視界から消え去るのは、おたがいのために、決してわるいことではあるまい」と考え、「ものうい、しかし、安らいだ気持ち」を覚えるのであった。

詳細は異なるものの、魯迅の「祝福」には再婚、迷信、罪の意識、死者の魂、再婚女性の死等、豊子愷の「化かされた博士」との共通項がいくつか見られる。林博士とその妻たちが大学教育を受けた都市の知識人であるのに対し、祥林嫂は田舎の無学な女性である。林博士は先妻のために自らの意志で再婚をしないと誓ったが、祥林嫂が再婚を拒否したのは貞節観念に忠実であろうとしたからである。再婚して失節した祥林嫂は、魯四老爺の儒教的観点から言えば「良俗を敗る者」、「不浄」な者であり、本来ならば忌み嫌われるべき存在であった。しかし、再婚相手と息子の相次ぐ死という不幸は人々に彼女の「罪」を一時的に忘れさせ、祥林嫂自身もこのことをそれほど気に病まずに済んだ。

林博士と後妻の李女史が先妻の亡霊を見るようになったのは、破約への罪の意識からである。一方、祥林嫂が亡霊に怯えるようになるのは、柳媽に再婚は「大罪」と脅かされ、そのための贖罪として寄進をしたにも関わらず、それが認められないことを知ってからである。つまり祥林嫂は、人々は自分の「罪」を一時的に忘れた、あるいは忘れた振りをしてくれていたに過ぎず、自分は永遠に赦されることのない存在であることを知ってしまったのである。柳媽は祭祀の手伝いに雇われたにも関わらず、「信心深くて精進と殺生戒を固く守って」おり、「鶏をしめたり、鵝鳥を割く仕事」は一切行わない。再婚前はともかく、幸せな再婚生活をおくった後は再婚を「大罪」とは考えなくなっていた祥林嫂に、柳媽は罪悪感を与え、罪滅ぼしに土地廟への寄進を勧めるが、その姿はまさに豊子愷の嫌悪した「いわゆる仏教を信じる人」である。<sup>37)</sup>



林博士と李女史が自らの罪悪感の投影として、前妻の幽霊という幻影を生み出したのに対し、祥林嫂の抱く恐怖は魯鎮の人々や当時の社会から強制されたものである。祥林嫂は旧時代の無学な女性である。一方、李女史は新式の高等教育を受けており、経済的にも文化的にも、また家庭環境という意味でも、祥林嫂とは比べられない程、恵まれている。しかし、旧式の価値観や社会通念、常識に縛られ、迷信や非科学的思考にとらわれ、不条理から逃れられず、自らの思考を放棄しているという点で、李女史と祥林嫂は同じである。林博士も最後には理性と冷静さを取り戻すものの、ありもしない霊の存在に怯え苦しみ、李女史のことも救済できなかった。この意味において、林博士も李女史も、そして祥林嫂も皆、旧時代の価値観や社会通念、迷信の被害者なのである。

二人の夫と子どもを失くし、身よりもなく、奉公先の魯家からも追放された祥林嫂は、魯四老爺に象徴される儒教的概念に否定され、柳媽に代表される民間信仰や仏教、道教の世界から疎外され、そして宗族からも閉め出された孤独な人間である。祥林嫂が「私」に魂の有無や地獄の存在、死後の生活を尋ねたのはこの孤独感の故であり、「私」が明快な答えを示せなかったのもまたその故である。祥林嫂にとって、魂の存在や死後の世界を信じることは希望であり、また恐怖でもある。祥林嫂の問いに、「私」が曖昧な返答しかできないのは、彼女の置かれたあまりに厳しい現実を知っているからである。戦後、祥林嫂のような現実に苦しむ人の数は格段に減ったことであろう。しかし、社会通念や常識に自らの意志を失い、迷信や非科学的思考に振り回される人は現代においても決して少なくはない。

「化かされた博士」において、最後に博士が導き出した結論は迷信に囚われることの愚かさであったが、それは換言するならば、既存の価値観や常識を疑うこと、そして自ら思考することの重要さであった。豊子愷は「化かされた博士」において、たとえ新時代の知識人であっても、自らの意志や思考力を放棄した場合、祥林嫂のような被害者



となりうるという危険を描くことで、新時代の子どもたちに社会通念や常識にとらわれることなく、自らの頭で論理的に思考することの重要性を訴えたのであろう。そして、これは豊子愷が「祝福」の「私」に代わって現代の祥林嫂に、そして社会に向けて呈示した一つの答とも言えよう。

おわりに

豊子愷が落語「搗屋幸兵衛」の嘶をどこで知ったのか、現段階では不詳である。豊子愷の御遺族が所有する豊の蔵書には落語集もあることから、<sup>38)</sup> 豊子愷はおそらく日本文化を知るため、あるいは日本語を学習する目的で、落語に関心を抱いていたのであろう。現在は残っていないが、かつては「搗屋幸兵衛」を収録した落語本を所有していたとも考えられる。また、周作人は落語を好み、しばしば寄席に通っていたようであるが、<sup>39)</sup> 周作人や豊子愷が日本に留学していた当時、寄席の数も多く、落語は庶民の娯楽として旺盛を極めていたことから、<sup>40)</sup> 豊子愷も都内の寄席で「搗屋幸兵衛」を耳にしたのかもしれない。いずれにしても、豊子愷は「搗屋幸兵衛」の笑いに魅了され、それを利用して旧時代の価値観や常識、社会通念に振り回されることの愚かしさを子どもたちに伝えたかったのであろう。

また、こうした旧時代の価値観や常識、社会通念に縛られ、自らの心の働きによって不条理の世界にとらわれた林博士と後妻の李女史は、「祝福」の祥林嫂とは時代も立場も違うものの、自らの自由を放棄している点において、実は同じである。林博士や李女史の不幸は祥林嫂の、そして彼女を取り巻く魯鎮の人々の不幸に通ずるものである。彼らは皆、古い価値観や常識の被害者であるが、それが自らの心に由来するという意味において、実は加害者でもあ

る。馬一浮の指導の下、人の行為そのものよりも、その背景にある心の働きに重きを置いていた豊子愷にとって、果報のために仏教儀礼を執り行う「いわゆる仏教を信じる人」や民間信仰の信者が嫌悪の対象であったように、心の自由を自ら放棄し、社会通念や常識、迷信等に譲り渡すこともまた人として許されざることであった。

1 雑誌『児童故事』は一九四七年一月に刊行された月刊誌で、児童教育と心理の専門家として著名な陳鶴琴（一八九二—一九八二）が編集長を務めた。児童文学作家、翻訳家として知られ、同誌のために多くの童話を翻訳した任溶溶（一九二三—）によると、実質的に編集を担当したのは任の大夏大学時代の同級生で、任の同誌への寄稿もすべてこの友人の依頼によるものであったという。任溶溶「我生下来应该干这一行的」（新民晚报）<http://www.seph.sh.cn/gikam/bkview.asp?bid=246888&cid=743884>、二〇一五年九月一四日参照。

陳鶴琴はコロンビア大学大学院で教育学と心理学を修めた児童教育の専門家で、一九一八年に帰国した後は児童教育と児童心理の第一人者として、研究と実践、行政の方面から児童教育の改善向上に努めた。一九四七年当時、陳は上海児童福利促進会や上海特殊児童補導院を設立し、理事長や院長を務める等、戦争被害児童の教育問題の解決にも従事していたため、『児童故事』の編集に当たるとは実質的に難しかったのであろう。嚴如平「陳鶴琴」、中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室『中華民国史 人物伝』第一卷、中華書局、二〇一一年、二五九—二六三頁。

2 児童書局は張一渠、石芝坤が共同で設立した出版社で、一九三一年一月に株式会社とし、上海市福州路四二四号に店舗を構えた。当初は主として、児童向けの国語や音楽の教科書を刊行していたが、一九三四年に児童作家の陳伯吹（一九〇六—一九七）が編集部主任となつてからは、児童を対象とした雑誌や読み物を多く出版した。一九三一年から三七年までの六年間に児童書局が出版した児童向けの読み物は千種余り、そのうち叢書類は三〇数種に及ぶ。中共上海市委党史資料征集委員会・中

豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

共上海市委党史研究室・中共上海市委宣傳部党史資料征集委員會合編『上海革命文化大事記（一九一九・五—一九三七・七）』上海書店、一九九五年、二五四頁。

同社は抗戦により一九三七年に業務を一時停止したが、一九四五年以降、潘公展（二八九五—一九七五）らが中心となって営業を再開し、一九四九年以降は通聯書店と童聯書店に分かれた。熊月之主編『上海名人名事名物大観』上海人民出版社、二〇〇五年、三九三頁。

3 豊子愷は「明心国」に類似した内容の作品を、「赤心国」というタイトルでも二作発表している。これら三作の相違や成立の詳細等については拙論「豊子愷の描いた桃源譚——『赤心国』（『東洋文化研究所紀要』第一六七冊、東京大学東洋文化研究所、二〇一五年三月、一六五—二〇六頁）で論じた。尚、同論で、童話集『化かされた博士』について「豊子愷の唯一の童話集」と記述したが（同一六五頁）、他にも児童向けの読み物として『猫叫一声』（上海万葉書局、一九四七年）や『少年美術故事』（上海開明書店、一九三七年）等も出版されていることから、「唯一」という表現をここにお詫びして訂正する。眉睫「児童文学五代人与『豊子愷童話』」『中国図書評論』二〇〇五年第三期、六五頁。

4 童話集『化かされた博士』の豊子愷自身による序文には「本冊子の一二篇の物語」とある。これは同書に収録された「大人国」が「児童故事」第六期、第九期（一九四七年六月、九月）の二回に分けて掲載されたため、同作品を二篇と数えたことによる。豊子愷「お菓子を食べる話——序に代えて」（原題「喫糕的話——代序」、豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第六卷、浙江文艺出版社・浙江教育出版社、一九九二年、二五九頁。

5 同上、豊子愷「喫糕的話——代序」、二五九頁。

6 茯苓は、サルノコシカケ科マツホドの菌核で、利水滲湿、健胃、精神安定等の薬効があるとして、多くの漢方処方で使用されている。伊田喜光総監修『傷寒・金匱薬物事典』万来舎、二〇〇六年、一四八—一四九頁。

7 前掲、豊子愷「喫糕的話——代序」、二五九頁。

- 8 川戸貞吉・桃原弘編『五代目古今亭志ん生全集』第三卷、弘文出版、一九七七年、一〇四―一二頁、二六八―二六九頁。  
榎本滋民「噺と芸」(D)「落語名人会一九 古今亭志ん朝」「佃祭」「搦屋幸兵衛」付録、ソニー・ミュージックレコーズ、一九九五年、八一―二頁)。尚、この噺は、もとは「小言幸兵衛」と連続する長い話であったが、三代目柳家小さん(一八五七―一九三〇)以降、現行の「搦屋幸兵衛」と「小言幸兵衛」の二席に分かれたとされている。
- 9 以下、本節における下線の箇所は、原文はすべて「鬼」であるが、内容に応じて「靈魂」「幽霊」と訳した。
- 10 豊子愷「博士見鬼」、前掲『豊子愷文集』第六卷、二六〇―二六五頁。
- 11 江戸時代、長屋の所有者は「地主」、「家持」と呼ばれた。多くは大店の店主や職人の棟梁、親方衆で、消防や水道等の分担金は自らが負担したが、長屋の管理は「家主(大家)」を雇って彼らに一任した。歴史群像編集部編『時代小説職業事典 大江戸職業往来』学研教育出版、二〇〇九年、二六五頁。
- 12 当時、世襲制の町年寄三名が町中の一切を支配し、一町または数町に一人置かれた名主が町年寄の指揮下、民事訴訟等に関わった。名主の下には、町内の大家によって組織された五人組が置かれ、交代で月行事を決め、実際の町務にあたった。
- 13 渡辺信一郎『江戸の生業事典』東京堂出版、一九九七年、四五頁。
- 14 前掲、川戸貞吉・桃原弘編、『五代目古今亭志ん生全集』第三卷、一〇九頁。
- 15 同上、一一〇頁。
- 16 小泉八雲「破られた約束」、平川祐弘編『怪談・奇談』講談社学術文庫、一九九〇年、一七五―一八三頁。HEARN, Lafadio, "Of a Promise Broken", *A Japanese Miscellany: strange stories, folklore gleanings, studies here & there*, Charles E. Tuttle Co. Inc. of Rutland, Vermont & Tokyo, Japan, 1967, pp.19-30.
- 17 林秀年『落語で味わう江戸の食文化』三樹書房、二〇一三年、六二頁。
- 18 米搗には、搗米屋に雇われた者の他に、杵をかつぎ、臼を転がして往來を歩き、呼ばれた家あるいは出入りの得意先で米を

豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

- 搗く大道搗がいたが、これは天保（一八三〇—四四）以降、廃れたという。前掲、渡辺信一郎『江戸の生業事典』、一三一—一三六頁。前掲、歴史群像編集部編『時代小説職業事典 大江戸職業往来』、一三三頁、八二—八三頁。
- 19 前掲、豊子愷「博士見鬼」二二三頁。
- 20 中村喬『中国歳時史の研究』朋友書店、一九九三年、四四—三五頁。王人湘著、鈴木博訳『図説 中国 食の文化誌』原書房、二〇〇七年、九六—九八頁。
- 21 魯迅「祝福」『魯迅全集』第二卷、人民文学出版社、一九八二年、二〇頁。
- 22 一九〇二年に清朝最後の科挙に合格し、「補行庚子辛丑恩正併科第八七名拳人」となったが、同年にその母が死去したため生涯出仕することはなかった。
- 23 周作人「祝福的儀式 彷徨衍義（二）」、鐘叔河編訂『周作人散文全集』第二卷（一九五二—一九五七）、広西師範大学出版社、二〇〇九年、三五九—三六〇頁。周作人「祝福 百草園（八五）」、前掲、鐘叔河編訂『周作人散文全集』第一卷（一九五二）、七四四—七四五頁。尚、周作人によると、鯉を放生するのは科挙を受験する読書人家庭に特有の風習で、登竜門の故事に由来するという。
- 24 王静著、池上正治訳『中国慈城の餅文化』勉誠出版、二〇一二年、一〇頁、八五頁、九七頁。
- 25 豊子愷「仏無霊」、前掲、豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第五卷、七〇六—七〇七頁。
- 26 Barne, Geremie. *An Artistic Exile: A Life of Feng Zikai (1898-1975)*. California: University of California Press, 2002. p.160.
- 27 豊子愷「放焰口」、「四軒柱」、前掲、豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第六卷、七二九—七三三頁、七三六—七四一頁。
- 28 弘一法師自身は大量の経典を読み、また『四分律比丘戒相表記』、『四分律含注戒本講義』、『南山道祖略譜』等、律学に関する著述も多い。しかし、修行の方法としては理論的理解よりも実践を重視し、豊子愷や信徒にも念仏や菜食を勧めた。
- 29 馬一浮の詩の中の「華嚴の偈」とは『大方広仏華嚴経』卷第九「夜摩天宮菩薩説偈品第十六」「唯心偈（六）」の「心如工画

師 画種種五陰 一切世界中 無法而不造（心は工みなる画師えしの如し 種種ごおんの五陰（物質、感受、想念、意思、認識）を画く一切世界の中に 法として造らざる（こと無し）」を指すと考えられる。

<http://21dzkl.u-tokyo.ac.jp/SAT/database.html> : 大正新脩大藏經テキストデータベース『大方廣佛華嚴經』(Text No.0278)  
Vol. 09 卷04652627 : 二〇一五年九月二十七日参照。

30 この箇所の原文「三界唯心（三界はただ心あるのみ）」とは、『華嚴經』「十地品」の「第六現前地」の經文、特に「八十華嚴」の「三界所有、唯是一心」に由来するもので、「心外無別法（心の他に別の法なし）」と対句をなす。三界とは、輪廻する生き物が住み、往来する世界の全体を指す。欲界、色界、無色界という三つの領域から構成され、輪廻の続く苦しみの世界とされる。

31 豊子愷「教師日記」（一九三八年一月一日）『宇宙風（乙刊）』第一九期、一九三九年二月一日、八〇九頁。

32 豊子愷は一九四九年に香港の波文書局から、魯迅の短編小説八篇を漫画化した『絵画魯迅小説』を出版しているが、その中には「祝福」も収録されている。尚、残りの七篇は「孔乙己」「故郷」「明天」「葉」「風波」「社戯」「白光」である。同書はその後、上海の万葉書店（一九五〇）等、複数の出版社から刊行された。豊子愷は魯迅を敬愛しており、他に『漫画阿Q正伝』も出版している（北京・開明書店、一九三九年）。

33 前掲、魯迅「祝福」五―二三頁。尚、引用箇所の日本語訳は、魯迅「祝福」『魯迅全集』第二卷、学習研究社、一九八六年、一九五―二一七頁による。

34 丸尾常喜「魯迅「人」「鬼」の葛藤」岩波書店、二〇〇〇年、二二六頁。

53 同上、二二三頁。

36 同上、二二二頁。

37 柳媽は仏教のみならず道教や儒教、民間信仰も信奉しているが、教義や宗旨ではなく果報にのみ関心を抱いている点において、豊子愷の嫌悪した人々と同義である。

豊子愷による落語の翻案童話「化かされた博士」について

38 豊子愷の末娘の豊一吟氏の御自宅には、豊子愷が愛読していたという『名人傑作落語集』第七卷（名人傑作落語集刊行会編、清教社、一九四〇年）が保管されている。豊子愷が同書を所有するに至った経緯等は不明である。尚、『名人傑作落語集』は管見の限り、国立国会図書館や国内の主要な大学図書館には所蔵されていないため、以下はあくまでも推測に過ぎないが、同集の種本と考えられる『名作落語全集』第九卷（駭人社書局、一九三〇年）に柳家小さんの「小言幸兵衛」（「搗屋幸兵衛」の完全版）が収録されていることから、この断が『名人傑作落語集』の他の巻に含まれている可能性は否定できず、豊子愷はそれを眼にしたとも考えられる。

39 周作人「日本の落語」、前掲、鐘叔河編訂『周作人散文全集』第七卷（一九三六—一九三七）、一三五—一四〇頁。周作人「学日本語」、同上『周作人散文全集』第三卷（一九五八—一九六二年）、三五四—三五六頁。

40 豊子愷が日本に留学していた一九二一年当時は「江戸・明治・大正を通じての第四次落語ブーム」で、東京の演芸界は大正初期の沈滞期を脱して大いに活気を呈していたという。山本進『図説 落語の歴史』河出書房新社、二〇〇六年、七六頁。

# “The Bewitched Doctor”, a Children’s Tale adapted from Japanese *Rakugo* by Feng Zikai

by Kimika ONO

Feng Zikai’s “The Bewitched Doctor” (*Boshi jian gui*, 1947) is a tale adapted from a classical Japanese *rakugo* story “*Tsukiya Kobei*”. Feng always aspired to works that had a good influence upon the reader, rather than those which were “interesting but lacked meaning”, and frequently hid a moral in them. In order to adapt a funny story from Edo period Japan as a tale for postwar Chinese children, and to hide a moral in them, he spent a lot of effort on the setting, the personality and occupations of the characters, and the ending. What then was the moral Feng wanted to impart to readers of “The Bewitched Doctor”? It was that it was foolish to be influenced by superstition and unscientific thinking, as well as by the values of a former age and commonly accepted social ideas.

While “The Bewitched Doctor” is an adaptation of the *rakugo* story “*Tsukiya Kobei*”, it was also influenced by Lu Xun’s novella “New Year Sacrifice” (*Zhufu*, 1924). Dr. Lin and his second wife, the main characters of the tale, are intellectuals with a modern education, but they are bound by the values of a former age and commonly accepted social ideas as they are tormented by the ghost of the first wife, an apparition that is born of their own minds. In that they are victims of old fashioned values and superstitions, they share a similarity with Xiang Lin Sao, the hapless widow in “New Year Sacrifice”. In “The Bewitched Doctor”, Feng writes of the dangers of a person, though an intellectual of the new age, abandoning the ability to think and becoming a victim just like Xiang Lin Sao. He advocates, especially to the children of the new age, the importance of thinking logically for themselves and not being swayed by accepted ideas and long-held beliefs.